白隠の言葉を読む

開悟にいたる道

柳　幹康

今回は開悟にいたる道について見てまいります。まずは白隠の次の言葉をご覧ください。

参禅や念仏、および経典の閲覧や読誦（など各種実践）はみな、開悟を助けるものである。たとえば旅人にとっての杖のようなものだ。杖には藜（あかざ）の杖や竹の杖などがある。藜と竹と材質こそ異なれ、歩みを助ける（という機能の）点で違いはない。藜は良く竹はだめだなどと言ってはならない。……（ところが）杖の短長や、旅装の可否、路銀の多寡などに気を取られる者がいる。ある者は杖についてばかり論じ、ある者は路銀についてあれこれ言う。（みな議論に夢中で）一歩たりとも進むことがない……肝心なのは杖でもなければ旅装でもなく、ただ真っ直ぐ進んで（目的地の）都に速やかに至ることなのだ。（議論する者ではなく、実際に

歩みを進める者こそが）賢いのである。
（『遠羅天釜（おらでがま） 続集』）

ここでは実践と開悟が、杖と目的地への到達に譬（たと）えられています。杖には藜や竹など様々な種類がありますが、その機能はただ一つ――目的地に向かう旅人の歩みを助けること――です。それと同様に実践には坐禅や念仏など各種ありますが、それらはいずれも開悟に至る手段に他なりません。重要なのは手段の差異を論じることではなく、その手段を実際に用いることで目的を達成することだというわけです。

ではなぜ様々な手段があるのかと言えば、それは人々に違いがあるからです。白隠は言います、「仏は医者の王様のような方である。八万四千種もの薬を調合し、（衆生の）八万四千種の病を全て根治なさるのだ。禅や教、律や浄土、これらはみな各種の病に応じて施された処方に他ならない」（『遠羅天釜 続集』）。これは仏教でしばしば用いられる「応病与薬（おうびょうよやく）」――病に応じて薬を与える――の譬喩（ひゆ）です。医者が病気に応じて様々な薬を処方するように、仏は衆生の機根（きこん）（能力）に応じて様々な道を開示したというわけです。我々は自身の状況に照らし合わせ、それぞれ自分に合った薬（実践の道）を選び、開悟という目的を達成すればよいのです。

実践の選択にあたり白隠は、注意すべきこととして以下の二点を挙げています。

第一が特定の実践に専念することの重要性です。白隠によれば「二種にわたり実践する人は、あぶはち取らずの結果となり、かえって生死（しょうじ）（輪廻（りんね））の原因となる誤った行為を助長させることに」なってしまいます。

第二が禅の卓越性です。白隠は言います、「真理を体得しようとする優れし者にとって、煩悩を断ち無知蒙昧（むちもうまい）を打破するには、（禅で

参究する）「無字」が一番である」（『遠羅天釜続集』）。

「無字」は趙州という禅僧に由来する代表的な公案（禅の課題）です。ある時「狗子に仏性はあるか」と問われた趙州は「無」と応え、後の禅門ではこれを「「有無」や「虚無」など一切の分別を越えた絶対のもの」として参究するようになります。白隠が若かりし頃一心不乱に取り組んだのもこの「無字」であり、これにより白隠は最初の大悟を得たのでした（『隻手音声（藪柑子）』）。

また白隠にとって「無字」は、「三要」の一つを満たすための重要な手段でした。「三要」とは高峰原妙という禅僧の説で、参禅に必要な三要素として(1)大信根・(2)大疑情・(3)大憤志を挙げます（『八重葎』巻三）。白隠はこの中の(2)大疑情（深い疑い）について、それが「無字」の参究により容易に得られると述べています（『遠羅天釜 続集』）。なお白隠によれば(1)大信根とは、仏心の存在と公案参究の重要性に対する確信であり（『息耕録開筵普説』、『於仁安佐美』巻上）、(3)大憤志は目的完遂まで怯まず進み続けるという決意です（『遠羅天釜』巻上）。

では具体的にはどう公案に参じるのでしょうか。それにより得られる開悟の体験とはどのようなものなのでしょうか。次回は公案と見性に関する白隠の言葉をご紹介します。

【主な参考文献】

西義雄「白隠禅師に依る日本の精神文化統一とその契機」『日本仏教の歴史と理念』（明治書院、一九四〇年）。

古田紹欽『白隠 禅とその芸術』（吉川弘文館、二〇一五年）。

柳 幹康（やなぎ みきやす）

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。現在花園大学国際禅学研究所副所長・准教授。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究――一心による中国仏教の再編』（法藏館）。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、
各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。
＊〆切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・感想など

本誌へのご意見・感想など、「編集室花園係」までお送りください。
お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園　係

＊住所、氏名を必ずお書きください。
＊俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)
＊なお投稿はお返しいたしません。

花園 hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花　園】第69巻 第11号(通巻第819号)
令和元年11月1日発行(毎月1日発行)
定価55円
【発行人】栗原正雄
【編集人】畠中寿浩
【印刷人】喜田眞司
【発行所】〒616-8035　京都市右京区花園
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400番
電話／075-463-3121番

表紙の絵　「自分を見つめ
自分にはなし 自分でこたえる」

他人からの言葉より、自分の心の声に
耳を傾けてあげよう。

絵・花咲幸絵

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】
http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002

＊乱丁、落丁本はおとりかえいたします。